

■開催概要

- シリーズ名称 : 2024鈴鹿サンデーロードレース第2戦
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数/279台

CBR250R Dream Cup	27台
CBR250RR Dream Cup	25台
インターJP250	12台
ナショナルJP250	21台
インターJ-GP3	10台 (内、HRC NSF250R Challenge……0台)
ナショナルJ-GP3	13台 (内、HRC NSF250R Challenge……8台)
インターJSB1000	41台
ナショナルST600	58台
ナショナルST1000	30台
インターST600	19台
インターST1000	23台
- 開催日 : 2024年5月18日(土)・19日(日)
- 天候/路面 : (18日)晴れ/ドライ、(19日)雨/ウェット

★次回レース予定

2024鈴鹿サンデーロードレース第3戦

- 開催日 : 2024年9月14日(土)・15日(日)
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 開催クラス : インターJSB1000、インター/ナショナルST1000・J-GP3・ST600・JP250、CBR250R Dream Cup、CBR250RR Dream Cup
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット



★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。
https://www.suzukacircuit.jp/result_s/



★レース写真は、バトルファクトリー様のHPで
ご購入いただけます。
<http://www.battle.co.jp/>



開幕戦同様、今回も土曜日に全カテゴリーの公式予選とCBR250R/CBR250RR Dream Cupの決勝レースが行われた

《8耐トライアウトFINALステージ》も開催された第2戦 全11カテゴリーの予選と決勝も白熱した展開に!

4月に開幕した今シーズンの鈴鹿サンデーロードレース。約1ヶ月のインターバルを経て第2戦が開催された。

鈴鹿サンデーロードレースは昨シーズンから全大会がフルコースを舞台に開催されるようになり、より盛り上がりを見せている。また、同じく昨シーズンからは土曜日に全カテゴリーの公式予選といくつかのカテゴリーの決勝レース、翌日曜日に他のカテゴリーのレースが行われる2DAYS大会として開催されており、シリーズ全4戦ながら、2日連続で楽しめるシリーズとなった。今回も開幕戦同様CBR250R/CBR250RR Dream Cupの2カテゴリーは土曜日の午後に決勝レースが行われ、ワンメイクならではの接戦で注目を集めた。

日曜日の見どころのひとつとなったのがインターJSB1000のレースと同時開催された《8耐トライアウトFINALステージ》だった。もはや恒例となった“コカ・コーラ”鈴鹿8時間耐久ロードレースへの出場権をかけて争われる選抜レースで、このサンデー第2戦が権利獲得の最後のチャンスとなり、参戦台数全41台の内34台が登録。権利が得られるのは完走上位15台、2倍以上の狭き門となり、いつも以上の激しいバトルが予想された。

インターJSB1000はメーカーが威信を掛けて進化させ続けるリッタースーパースポーツを操り、百戦錬磨の国際ライセンスホルダーたちがハイレベルのバトルを繰り広げる国内最高峰カテゴリーだ。そのため、そもそも注目度が高いのだが、今回の大会ではそこに各チームの「是が非でもトライアウトを通過する!」という意気込みが加わり、予選から決勝レースまで激しい攻防戦が展開された。いつもは別カテゴリーで活躍を見せる有力選手が招集されて参戦したり、複数台で参戦するチームがあったりと、見どころも多かった。

また、毎回多くの参戦台数を集めるナショナルST600には今回はなんと58台が参戦。そのため予選はA・Bの2グループに分けて行われ、フルグリッド44台への生き残りをかけて白熱したタイムアタック合戦が各20分ずつ続いた。激戦が予想された決勝レースでも各ライダーが性能差の少ないマシンを駆り、目まぐるしく順位を入れ替えるバトルが披露された。

次戦は鈴鹿8耐、そして最後の鈴鹿4耐<ST600>後に開催される9月14日(土)・15日(日)の第3戦。おそらく残暑厳しい中での熱く激しいバトルにも是非ご期待いただきたい。



ゼッケンナンバー横に貼られた「TRY OUT」の赤いステッカーが《8耐トライアウトFINALステージ》に参戦するマシンの証

■CBR250R Dream Cup

スリップストリームを使い合っのタイムアタック合戦が繰り広げられた公式予選。ポールポジションを獲得した加藤元紀から12番手までが2分45秒台という僅差での予選となった。決勝レースでは加藤が良いクラッチミートを披露するが、その横から3番グリッドスタートの入江高伸が加速していく。ホールショットを奪ったのはその入江。2番グリッドスタートの秀崎隆、入江のオーダーでオープニングラップを終了すると、その2台が後続を引き離すことに成功するが、秀崎隆と入江は再び集団に飲み込まれる。その後は11台がトップグループを形成。その中から一時的に山根顕、入江、片口神月、柴田真優姫、秀崎が抜け出す。その後もコーナーごとに目まぐるしく順位が変わったが、入江がトップチェッカーを受けた。



CBR250R Dream Cup表彰式(優勝:入江高伸、2位:加藤元紀、3位:秀崎隆)

■CBR250RR Dream Cup

開幕戦同様、福井宏至、岩月寿樹、辻本範行というベテラン3名が公式予選で好タイムをマーク。単独走行状態でアタックを続けた福井が2分35秒510のトップタイムを記録してポールポジションを獲得する。決勝レースでは2番グリッドスタートの岩月がホールショットをゲット。すぐに福井がトップに立つ。福井、岩月、4番グリッドスタートの大倉拓夢、3番グリッドスタートの辻本のオーダーでオープニングラップを終了。2周目のメインストレートで大倉が岩月に並び、これをパスして2番手に。しかし、岩月が大倉を抜き返す。そのバトルの間に福井が抜け出すことに成功。その若干後方を岩月、大倉、辻本のオーダーで走行する。終盤に岩月が福井に接近したが、なんとその岩月が転倒。福井が開幕2連勝を飾った。



CBR250RR Dream Cup表彰式(優勝:福井宏至、2位:大倉拓夢、3位:辻本範行)

■インター／ナショナルJ-GP3・HRC NSF250R Challenge

保坂洋佑が公式予選で2分21秒988をマークしてタイミングボードのトップに、竹本倫太郎がそれを上回る2分21秒802を記録し、さらに2分21秒682へと自己ベストを更新する。ポールポジションからスタートした竹本の横から伸びていったのは2番グリッドスタートの保坂。それに仲村瑛冬が続く。仲村、保坂、竹本のオーダーでオープニングラップを終了。その3台がテールtoノーズのバトルを展開する。そこに遠藤翔類、針尾大治郎、戸高綸太郎が加わり、トップグループは6台での争いに。積極的な走りを披露する針尾が後続を引き離しにかかるが、5周目の130Rでは遠藤がトップに。その遠藤が6周目に転倒する。保坂が総合優勝を飾り、インターJ-GP3をも制した。ナショナルJ-GP3のウィナーは中川尚人だった。



インターJ-GP3表彰式(優勝:保坂洋佑、2位:仲村瑛冬、3位:竹本倫太郎)



ナショナルJ-GP3表彰式(優勝:中川尚人、2位:針尾大治郎、3位:戸高綸太郎)

■インター／ナショナルJP250

公式予選では福井宏至がトップタイムをマークしてマシンをピットに入れた後、船田俊希が2分31秒340をマークして福井のタイムを上回る。ウェット宣言が出され、決勝レースは6周で行われることに。ポールポジションを獲得した船田がスタートで出遅れる。ホールショットを奪ったのは2番グリッドスタートの福井。福井はオープニングラップから後続を引き離しにかかる。それに続くのは前田誠司。2周目になると福井と前田がテールtoノーズの状態になり、3周目の1、2コーナー間では前田が前に。その後は前田、福井、中川涼、南博之、三浦雄一の5台がバトルを展開。徐々に単独状態となった南がトップチェッカーを受け、ナショナルJP250のウィナーに。インターJP250では総合3位の中川がクラス優勝を飾った。



インターJP250表彰式 (優勝: 中川涼、2位: 船田俊希、3位: 鈴木悠大)



ナショナルJP250表彰式 (優勝: 南博之、2位: 前田誠司、3位: 福井宏至)

■ナショナルJP250車両銘柄賞表彰式



ナショナルJP250車両銘柄賞表彰式 (Honda賞: 南博之、ヤマハ賞: 前田誠司、カワサキ賞: 松田洋、BMW賞: 佐々木龍人)

■インターST1000

山中将基が公式予選でまず2分12秒888をマーク。山中はマシンをピットに入れたが、残り5分を切ったところで再度アタックして2分12秒331を記録する。開幕戦に続き、2戦連続でポールポジションを獲得した山中がロケットスタートを決め、2コーナー立ち上がりまでに若干後続を引き離すことに成功。しかし、2番グリッドスタートの片平亮輔がその山中の背後に接近し、これをパスしてトップに浮上する。その2台の後方では3番グリッドスタートの中島陽向、5番グリッドスタートの羽野慎一も激しいバトルを展開。徐々に片平、山中、中島、羽野はそれぞれ単独走行状態に。山中がペースアップし、4周目になると片平のテールを捉える。ファイナルラップのヘアピンでトップに立った山中が逆転優勝を決めた。



インターST1000表彰式(優勝:山中将基、2位:片平亮輔、3位:中島陽向)

■ナショナルST1000

公式予選では戸谷健司と池田寛之の2名のみが2分19秒台に突入。2分19秒580をマークした戸谷が開幕戦に続いて2戦連続でポールポジションを獲得したが、決勝レースではその戸谷がスタートで出遅れる。ホールショットを奪ったのは2番グリッドスタートの池田。それに10番グリッドスタートの小森直樹が続く。池田は2番手以降に4秒628のアドバンテージを築いてオープニングラップを終了。小森が2周目の1コーナーで転倒したことにより、池田にとってはさらに有利な展開となる。辻尾裕司が単独2番手に浮上。それに永山翔太が続く。雨が強くなると中野涼真がペースアップ。中野、永山、戸谷の3台が3番手争いを展開する。中野は終盤に辻尾に迫るが、池田、辻尾、中野のオーダーでチェッカーを受けた。



ナショナルST1000表彰式(優勝:池田寛之、2位:辻尾裕司、3位:中野涼真)

■ナショナルST600

2つのグループに分かれて行われた公式予選。Aグループでは富江慧が2分18秒688をマーク。富江のそのタイムがグループトップとなった。富江のタイムを上回る2分18秒202を記録したBグループトップの楠留維がポールポジションを獲得する。ホールショットを奪ったのはその楠。それに3番グリッドスタートの富江が続く。富江はすぐに楠をパス。富江、西山尚吾、細谷匠のオーダーでオープニングラップを帰ってくると、富江が後続を引き離しにかかる。その後方では西山も単独2番手に。再び富江、西山、細谷、小野拓也がトップグループを形成。そこから富江が頭ひとつ抜け出す。小野は4周目に一気にトップに立つとそのまま独走状態に。小野が後続に8秒625ものアドバンテージを気づいて優勝を決めた。



ナショナルST600表彰式 (優勝:小野拓也、2位:富江慧、3位:細谷匠)

■インターST600

公式予選ではまず丹羽貴大が2分16秒956を記録するが、塚原溪介がそれを上回る2分16秒276をマークしてタイミングボードのトップに。それに2分16秒940の村瀬豊が続く。決勝レースでは3番グリッドスタートの丹羽が飛び出してトップに。ポールポジションスタートの塚原と2番グリッドスタートの村瀬が出遅れる。丹羽はオープニングラップから早くも後続を引き離しにかかるが、その丹羽の背後に井手瑠輔が接近。3周目の1コーナー進入までに井手が丹羽をパスする。3番手を走行する福田琢巳をパスした塚原が井手、丹羽のトップグループにも接近すると、塚原はまず丹羽をパスして2番手に浮上。井手のテールをも捉え、4周目の130R進入でこれをパスした塚原が逃げ切ってトップチェッカーを受けた。



インターST600表彰式(優勝:塚原溪介、2位:井手瑠輔、3位:丹羽貴大)

■インターJSB1000

公式予選では中村修一郎がまず2分11秒台をマークする。高居京平とAzlan Shah Kamaruzamanも2分11秒台を記録。中村は最後の最後で2分11秒076をマークして自己ベストを更新し、2戦連続のポールポジションを獲得する。決勝レースではその中村が良いクラッチミートを披露してホールショットをゲット。それにAzlan、吉廣光と続く。中村はオープングラップから早くも後続を引き離しにかかるが、転倒したライダーが起き上がれなかったことにより、赤旗が出されて中断。8周のままやり直しとなったレースでも中村がホールショットを奪ってリードを築く。Azlanが中村に追いついた後、その2台がバトルを展開。中村に少しのアドバンテージを築いて走行したAzlanがトップチェッカーを受けた。



インターJSB1000表彰式(優勝:Azlan Shah Kamaruzaman、2位:中村修一郎、3位:吉廣光)

**Voice
of
Pick up
Riders**
-SUNDAY EDITION-
この日、キラリと光った
ライダーに一问一答

この日、キラリと光ったライダーに一问一答
「Voice of Pick up Rider -SUNDAY EDITION-」

インターJSB1000で2位入賞、鈴鹿8耐第45回大会への出場権を獲得した

中村 修一郎 選手

(信州 Re:N with TOTEC / BMW M1000RR)



Q. 公式予選では最後の最後に自己ベストを更新し、ポールポジションを獲得しました。

A. 予選が開始され、少し経ってからコースインしたのですが、クリアラップが取れませんでした。そこで一旦ピットに戻り、もう一回コースインしました。タイヤは厳しかったのですが、クリアラップが取れ、思っていたタイムを出せました。

Q. 赤旗前も再開後のレースでも良いクラッチミートを披露し、ホールショットを奪いました。

A. スタートはうまくいきましたが、Azlan選手にパスされました。開幕戦ではマシンにトラブルが出ましたし、雨の中でM1000RRを走らせるのは今回がほとんど初めてでした。Azlan選手の方がアジャストできていましたね。抜かれてからは自分のペースを守ることに専念しました。

Q. トライアウトをクリアし、鈴鹿8耐への出場権を獲得しました。

A. このチームは様々なスポンサー様に協力いただいています。出場権を得ないわけにいかないですし、今回はウェット路面だったので慎重に走りました。本番レースではさらなる結果を求めています。応援よろしく願います。